

『ヨブ記の黙想 試練と恵み』前半（ミラノ教区の司祭向けの霊操）

カルロ・マリア・マルティーニ枢機卿著 今道瑤子訳 1991年 女子パウロ会

まえがき

「あなたがたは、わたしが試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」（ルカ 22：28）はミラノの教区司祭に向けた霊操による黙想会のテーマです。受難を目前にイエスが弟子たちに言われたこの慰め深い言葉は、キリスト者の生活、また一般の人々の生活にも、苦難がつきものであることを想起させてくれます。基本のテキストにヨブ記が選ばれたのはそのためです。

ヨブは、選ばれた民の一員ではなく、遙か遠い国に住んでいた謎の人物です。紀元前2千年ごろにはすでに東方の賢者たちに口づたえに広まっていました。周囲から正しい人とみなされ、自分でもそう思っていたヨブは、試練に見舞われて一切を失います。神の前に正しい者たちに襲いかかる苦しみの隠された意味を理解しようと、バビロン捕囚となった人たちもヨブ記から学ぼうとしました。きっとヨブの嘆きに自分たちの思いを重ね合わせたでしょう。

神に向かって理由の説明を要求できるのか？ いや、神に向かって理由を問いてはならない。むしろ、神の計り知れない英知を信じるべきだとヨブ記の作者は言います。

ヨブ記の問題は、信仰の問題です。信仰生活には神との取引の余地はありません。崇高な信仰の恵みには、敬虔で無私の心で応えなければなりません。確かにヨブは友人が責めるような罪を犯しませんでした。けれども、宗教人が犯しがちな罪、神の裁判官になってしまいました。この黙想は、私たちの信仰の質、理解しがたい神の秘義に対しての従順、知性の従順について問いただします。最後にヨブ記と雅歌を独創的に比較したのは、ヨブが追究したのは愛の問題だったことを明らかにするためです。

この黙想から実りを得るためには、生ぬるさから抜け出し、神の渇きを感じる霊的な努力が必要です。この霊操の目的に「祈りの精神への新たな回心」を挙げられています。祈りの雰囲気こそこの黙想書は、霊的糧に、励ましに、慰めに、そして力にもなるでしょう。

またこの黙想は、自分の心の狭さが「神様がどんな方か？（神様のイメージ）」まで狭くしてしまうことを避けさせてくれます。そして、自分を正当化しようとして真理から外れることも防いでくれます。なぜなら、私たちに先行して私たちに越える“神の愛”の測り難さに目を開かせるからです。私たちに先駆けて愛してくださる神の無私な愛に目覚めましょう。そうしたら、試練や苦悩の最中でも、何の報いを求めることもなく“愛する能力”を神から受けられるのです。この黙想書は、愛し、希望し、主との交わりを願い、その交わりに自分の全存在を賭けるように私たちに励ましてくれます。私たちのために全てを与えてくださる神が私たちから期待されるのは、情熱的な愛と献身だけです。

導入

父なる神様、私たちは自分の貧しさ、何を言い、何を考えたらよいのかさえわからない者であることを自覚します。私たちの適性や能力はあなたから来ること、聖霊の恵みによることを信頼して

あなたの前にいます。イエスの母であり、私たちの母である処女マリア、どうかこの霊操を導いてください。あなたは多くの試練を乗り越え、魂を剣で刺し貫かれる経験をなさったのですから、どうか私たち、人類、そして教会が経験しているさまざまな試練の意味を洞察する恵みを私たちのために取り次いでください。

祈りの精神を新たにすること

霊操の根本的な目的は“回心”です。一層善い方に向かうように神様に願うことです。“回心”には人それぞれに様々なテーマがありますが、今回は“祈りの精神の刷新”を強調します。

司牧に追われる1年間、様々な仕事に携わるうちに、祈りの精神が乏しくなるからです。毎日の霊操で3つのことを取り戻しましょう。

1. 祈りにあてる時間について：普段よりもっと時間を取りましょう。

習慣について：習慣はとくくだらけるものです。黙想中に、規律を正しましょう。

祈り方について：敬虔さ、姿勢と動作、注意深さ、神への敬意、愛情の深さを見直しましょう。祈りは情緒的なものです。困難な状況にいと、情緒が深層に沈んでしまうことがあります。祈りの中に、神に対する深い愛情がなければ、無神論者とも戦えません。

「あなたがたは、わたしが種々の試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」（ルカ 22：28）の御言葉をテーマにいくつかのテーマをあげていきます。

霊操のテーマ

人生の終わりに「あなたがたは、わたしが種々の試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」というイエスの美しい言葉を聞いたらどんなに嬉しいでしょう。面白いことに、この言葉は「使徒たちの間で一番誰が偉いだろうか？」（ルカ 22：24）と論じ合っていた後にイエスがいさめた言葉です。イエスは弟子たちのグループにあった、野心や妬みが現れた時に、それを機会に「偉大な者でなりたければ奉仕する者になりなさい」と教えた後に「あなたがたは、わたしが種々の試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」と言い足したのです。イエスは弟子たちに、欠点や弱さがありながらも誠実であることを知っていました。

これから始まる黙想の導入として、このイエスの言葉を詳しく見ていきましょう。

1. 「ペイラスモス」という言葉は聖書によく見られます。本来は「調査」「試み」という言葉です。ある人がどれだけ価値があるか、どれくらい忠実か、どれくらいの抵抗力があるかを試すことです。加えて、聖書では2つの意味が加わります。1つは「誘い（いざない）」です。何か悪い力、悪への傾きが原因で罪へと刺激されることを言います。人生に待ち構えている「誘惑」です。2つ目は「試練」です。私たちがたびたび出会う困難を暗示しています。私たちの心にまかれているものでもあります。種まきの例え話の中で、石地に落ちた種についてこう述べられています。

「石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである。」（ルカ 8：13）

逆説的ですが、み言葉は人の心に入ること、人は試練にさらされます。

「石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐに喜んで受け入れるが、自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために苦難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。」（マタイ 13：20～21）

試練、誘惑、悩みなどは、地上で生きる人間、特に義人（神に忠実でありたいと願い信仰の道を歩む者）にはつきもので当たり前の状態です。

ヨブ記はそのことを詩的に表現し「地上の人には、厳しい労働があるではないか」（7：1）と書いています。エルサレム聖書は「『厳しい労働』はむしろ兵役に服する状態、すなわち戦いと責任を意味する」と解説しています。ギリシア語訳は、人生の試練と関連づけています。ウルガダ訳ラテン語聖書では「地上における人の生涯が戦いにして」と表現されています。この句は『キリストに倣いて』の第1巻13章では「誘惑に抵抗すること」に引用されていますが「この世に生きている限り、私たちは艱難や誘惑に遭わないわけにはいかない」のです。

ヨブは「誘惑は地上における人の生活である」（7：1）と記し次のように続けています。

傭兵のように日々を送らなければならない。奴隷のように日の暮れるのを待ち焦がれ／傭兵のように報酬を待ち望む。そうだ／わたしの嗣業はむなしく過ぎる月日。労苦の夜々が定められた報酬。横たわれればいつ起き上がるのかと思ひ／夜の長さに倦み／いらだって夜明けを待つ。肉は蛆虫とかさぶたに覆われ／皮膚は割れ、うみが出ている。わたしの一生は機の梭よりも速く／望みもないままに過ぎ去る。忘れないでください／わたしの命は風にすぎないことを。（7：1b～7a）

エルサレム聖書は次のように注解してします。「全人類と連帯して苦悩し、死を観念したヨブは死ぬ前に束の間の平和を願う祈りを作った。」（P1049）

この旧約の一コマは、とても具体的に人生を1つの試練として描いています。

2. イエスは試練について語りながら「あなたがたは踏みとどまってくれた」と言われます。ギリシア語では「あなたがたは去っていかなかった」となります。これはお褒めの言葉です。あなたがたはあんなに苦しんだのだから、立ち去ることもできたのにそうしなかった、という意味です。

イエスが弟子たちに「あなたがたも離れて行きたいか」と問われた場面が浮かんできます。あの時ペトロは「主よ、わたしたちは誰のところに行きましょう」と答えました。イエスは弟子たちが最後まで堅忍し、自分を見捨てなかったことを認めてくださいます。（ヨハネ 6：67～68）

聖書では「忍耐」にまつわる様々な表現が出てきます。「ことばを守る」とは、辛抱強く耐える忍耐を指します。

「良い土地に落ちたのは、立派な善い心でみことばを聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」 (ルカ 8:15)

こういう人は、忍耐、持久力をもってみことばを守りながら試練に立ち向かいます。試練が後戻りを促し、勇気を失わせようとする時、これに抵抗する態度は、直接の勝利を目指すのではなく、確固とした態度で抵抗し続けることです。ヨハネ福音書では「とどまる」という言葉で同じことを表現しています。(15:7)

3. 「あなたがたは、わたしが種々の試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」とあり、漠然とした「試練のとき」ではありません。では、イエスが出会われた試練とはどのようなものでしょうか？

「それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。イエスは40日間そこにとどまりサタンから誘惑を受けられた」 (マルコ 1:12~13)

マルコでは、冒頭に誘惑の場面が描かれています。ただ一度だけ試みられたということではなく、イエスの生活がいつも試練に帯びていたことを示すためです。

ヘブライ人への手紙はそのことを一層強く書いています。

「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様の試練に遭われたのです」 (4:15)

「あらゆる点において」ですから、生涯の様々な具体的な場面で、苦難、労苦、難儀、嫌気がさす経験され、それらを弟子たちと共になさったのです。

けれども「わたしの試練」とイエスが言われるとき、彼自身の体験にとどまりません。メシアとして、神の民すべてを集約する者として語っています。メシアとしての試練、み国実現のための試練まで含まれます。弟子たちも、ふるいにかけてたりしてその試練に巻き込まれました。私たち信仰者の試練も同様です。生活している具体的な場面で試練に出くわします。教会が、社会が体験する諸問題です。これらは、メシア的な民の頭イエスの試練です。また、これから生まれてくる人類の試練にまで及んでいきます。民族同士の争い、貧富の差、宗教間の争い、地球温暖化なども「わたしたちの試練」です。これらのことは、私たちの重荷となり、怒りを募らせ“信仰”“希望”“愛”をふるいにかけて“不安”にします。けれどもまさにそういうことこそ「わたしの試練」とイエスの言われることなのです。置かれた立場はそれぞれですが、自分が愛する人々の苦しみに巻き込まれていきます。

4. 「あなたがたは、わたしが種々の試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。」 「わたしと一緒に」ということで、イエスは味わいを加え、愛情の面、友同士の人格的つながりを強調しています。イエスを愛しながら、彼と親しく、一緒に試練に耐え忍びましょう。

イエスは共にいて、試練を見極め、よく理解できるように導いてくれます。試練から逃げず、正面から見据えましょう。

試練が人生にとって意味があることを知り、誠実に試練を生き抜くことはキリスト者に限らず知恵を得る機会です。隣人愛を育て、人の必要に応えるために献身的に働くにつれて、それだけ試練も増していきます。反対に、自分の環境に閉じこもり、人間嫌いになるなら個人的な挫折の試練しか体験しないでしょう。

ヤコブは手紙の冒頭でこう激励しています。

「わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。あくまで忍耐しなさい。そうすれば、完全で申し分なく、何一つ欠けたところがない人になります」（1：2～4） 続いて

「試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束されたいのちの冠をいただくからです。」（1：12）と付け加えています。これは人生の要約です。聖ヤコブは新約の素晴らしい英知を自分の言葉でこう表してくれたのです。

ヨブ記

試練は人生につきものですが、それで人生が悲しいものにはなりません。霊操のテーマは、この試練に触れるものです。人生で心の平安を保証する唯一の道は、試練にふさわしく対応することです。試練を取り除くのではなく、それを生き抜くことがキリスト者を成長させ、充実した人生にしていきます。これからの黙想の間、次のようになさってくださるイエスの前に自分を置きましょう。「主イエスよ、あなたはわたしが受ける試練に共に留まろうとされます。あなたが試練を真正面から見つめ、あいまいさを拭い去って、試練に的確に対処した姿になりたい。あなたが試練を愛を込めて受け止め十字架を抱きしめたように、私たちもその試練を抱きしめるのを手伝ってください。主よ、人生を1つの試練と受け止めて、これに立ち向かう者の喜びを体験できるようにしてください。わたしの教区民の試練を克服する正しい態度を取れるようにしてください。」

1. 試練の秘義への導入

「主よ、試練を素直に受け止める恵みをお与え下さい。試練は、ただの出来事ではありません。1つの秘義です。私たちの試練を通してあなたを知り、あなたの秘義に分け入ることができますように。父なる神よ、試練を通してあなたの秘義をわずかでも垣間見る恵みをお与え下さい。」

わたしはかなり前から、ヨブをテーマに霊操をしたいと考えていました。とても魅力的なテキストですが難しくてためらっていました。今回やっと、この神秘的で謎めいているヨブ記の扉をほんの少し開くのを助けてくれそうなページを選んで、皆さんに紹介することに決めました。黙想の手始めにヨブ記の最初の2章を取り上げます。

ヨブの序文の物語

登場する主な人物は3人です。

ヨブ：ウツという土地の人で、イスラエルの領外の人です。「無垢な正しい人で、神を恐れ、悪を避けて生きてきた」（1：1b）彼は裕福でした。「7人の息子と3人の娘を持ち、羊7千匹、ラクダ3千匹、牛5百匹、雄ロバ5百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。」（1：2～3）

サタン：人間の行為を否定的に受け止めるように訴える不思議なもの。たびたび神の宮廷に登場しヨブに試練を与えることを要求します。

神：宮廷の高みから人間の行動を見守っていて、何らかの仕方で世界に臨在なさいます。

物語は2つの時、**2つの試練**からなっています。

まずヨブは**財産の点**で試みられます。

「ヨブの息子、娘が長兄の家で食事をし、ぶどう酒を飲んでいた日のことである。ヨブのもとに使者がやって来て言った。「牛が畑を耕し、その傍らで雌ろばが草を食んでおりますと、シェバ人が襲いかかって、これを奪い、若者たちを剣で打ち殺しました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「神の火が天から降り、羊と若者たちを焼き尽くしました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「カルデア人が三隊に分かれて、らくだを襲い、これを奪い、若者たちを剣で打ち殺しました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「あなたのご息子、ご息女がたは、ご長男の家で食事をされ、ぶどう酒を召し上がっておられました。その時、大風が荒れ野の方から吹いて来て、家の四隅を打ち、それが若者たちの上に倒れ、皆様は亡くなられました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」

（1：13～19）

この**厳しい試練**にあったヨブの態度はこう述べられています。

「ヨブは立ち上がり、上着を引き裂いて、頭をそり、地に身を投げ、ひれ伏して、言った。／「私は裸で母の胎を出た。／また裸でそこに帰ろう。／主は与え、主は奪う。／主の名はほめたたえられますように。」このような時でも、ヨブは罪を犯さず、神を非難しなかった。」

（1：20～22）

そこでサタンは再びヨブを試すことを願い「ヨブに手を下し、頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせ」（2：7）しました。

すべての財産を失った上、健康を奪われたヨブは神に呪われた者とみなされてしまいます。家を出て、灰の中にうずくまる姿は、惨めさ以外の何者でもありません。すると妻は「どこまでも無垢でいるのですか。神を祝福して死になさい」と言ったとあります。実は、ヨブの妻は神を祝福する

ように言っているのではなく「呪え」と言っているのです。聖書は神に背く表現を避けてこのように表現しているのです。

「しかし、ヨブは彼女に言った。「あなたは愚かな者が言うようなことを言う。私たちは神から幸いを受けるのだから、災いをも受けようではないか。」このような時でも、ヨブはその唇によって罪を犯さなかった。」（2：10）

悲しみを共にし、慰めようとする友人がヨブを訪ねてくるところで1～2章の物語は終わります。遠くからヨブを見た3人は、見分けもつかぬほどに変わり果てた彼の姿を見て嘆き、泣き出しました。7日7晩、ヨブと一緒に黙って座っています。ここまでがヨブ記の序文です。

問い

1. 登場人物は何を意味するのでしょうか？

ヨブは確かに実在の人物ではありません。実験室のモデルのようです。彼はとりわけ正しい人で、万が一家族が過ちを犯していた場合のためにいけにえを捧げ、神から祝福を受けていました。ヨブは、罪を犯していないのに、罪がもたらした不幸を忍ぶように神に召されていました。この意味で、ヨブは実在の人間ではあり得ません。なぜなら私たちは、何かしら神に申し訳ないと感じる罪を持っているからです。試練は自分の罪のせいだと思ふのが普通です。そこで著者は、わざわざ抽象的なヨブという人物を作り出して、あまり知られていない神の側面を明らかにしようとするのです。ヨブは、特定の宗教や宗派と結ばれずに紹介されていないことも興味深いです。ただ善意ある正直な人で、神に対して誠実な人なら誰でもヨブの中に自分の姿を重ね合わせることができます。サタンは、艱難を通して人を誘惑し試みるものを意味します。

2. この事件の核心は何でしょうか？

導入で活躍するのがヨブとサタンです。サタンの願いを読み返しましょう。事件の火蓋を切るのはサタンですから。

「主はサタンに言われた。「あなたは私の僕ヨブに心を留めたか。地上には彼ほど完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている者はいない。サタンは主に答えた。「ヨブが理由なしに神を畏れるでしょうか。あなたは彼のために、その家のために、また彼のすべての所有物のために周りに垣根を巡らしているではありませんか。あなたが彼の手の業を祝福するので、彼の家畜は地に溢れています。しかし、あなたの手を伸ばして、彼のすべての所有物を打ってごらんください。彼は必ずや面と向かって、あなたを呪うに違いありません。」（1：8～11）

サタンが賭けているのは人間の自由です。「人間の行為に無償なことなどあるだろうか？」 「人間が自由に行う行為で見返りを求めないものがあるだろうか？」という問いです。「お返し目当てで『あげるから、ください』という駆け引きではないか？」ということです。

このような責めを私たち自身、心の底に感じます。人間は無償で愛することを知らず、行動の裏に利害が絡み、時には恨みや復讐心が行動の動機になります。本当に透き通った清い行動は存在しない

いで、宗教的な行為でも報いを受ける希望から生まれたり、すでに報いを受けた感謝から行います。それは、私たちを取り巻く悲劇です。人の行動を、それが真理や純粋さに基づいているのか、それと利害に基づいているのか知りたがります。自分の召命を選び取ることや、それに踏みとどまること、自分の奉仕についてもこう自問するでしょう。「これは神の愛の実りだろうか？ それとも安楽・打算・自然的傾き・先天的資質のためだろうか？」 行動の動機に混じり気があったと気づくと情けなくなります。

サタンは「本当の宗教性などない」「無償に神との契約を生きることなどできない」と責めます。神は、人間に対等な契約を結び、真実で誠実で、愛の答えを待っていてくださる。でも、神の態度に人間が答えるのは不可能だ。宗教は結局、民衆のアヘン、見返りなど様々な動機付けを隠す蓋に過ぎない、とサタンは主張します。

序文の核心は、人間に対するサタンの賭け、人間の真実を信じる神の賭けです。したがって、これは普遍的な悲劇です。人間が自由を行使する様々な場面で当てはまります。そして、悲劇が明らかになるのは、試みられる人に罪意識がなく、とても厳しい試練に襲われる時です。

私たちは、真実であろうとする自分の力も、そうできない力のなさも、この賭けの対象になっていることに気づくでしょう。だからヨブの物語に引き込まれるのです。ある注釈者がこう書いています。

「ヨブの聖劇はとても強烈で読者を無関心にはさせておかない。心の中で自問しながら物語の人物になる。物語に没入して登場人物の一人になれば、神のまなざしのもとに、ヨブの永遠普遍の劇が上映されると“試み”にさらされた自分を発見するだろう。もし、情熱を込めず、その場に身を置こうとしないなら、劇は未完に終わるだろう。」（アロンソ・シェケル『ヨブ』1985年 P108 表現を一部改めました）

これが、ヨブ記の序文で体験して欲しいことです。個人的に自問しながら黙想しましょう。

教訓

“試練”というテーマを取り上げ、4つの反省点をあげます。

1. 試練は全ての人、特に善意ある人も避けられない現実です。

ヨブは、全てにおいて完全な人でしたから、誘惑に遭う原因は何一つ起こりませんでした。ですから、試練・誘惑は、善人悪人を問わず人生に根本的なことです。

2. 神は秘義です。その人がどれだけ大事かを分かっているながら試練におかれます。

「あなたの神、主がこの四十年の間、荒れ野であなを導いた、すべての道のりを思い起こしなさい。主はあなたを苦しめ、試み、あなたの心にあるもの、すなわちその戒めを守るかどうかを知ろうとされた。」（申命記8：2）

この神のなさり方は、御子イエスをよく知っていたのに“受肉”の試練におかれた神の不可解な秘義の一部のようです。受肉とイエスの生涯も試練の1つです。

3. 試練の時にとるべき態度は服従です。

試練は受け入れることが大事で、どうしてかと問うことではありません。「私は裸で母の胎を出た。／また裸でそこに帰ろう。／主は与え、主は奪う。／主の名はほめたたえられますように。」（1：21）序文では、ヨブが試練を受け入れたように見えますが、その後、段階的に展開されます。

「しかし、ヨブは彼女に言った。「あなたは愚かな者が言うようなことを言う。私たちは神から幸いを受けるのだから、災いをも受けようではないか。」このような時でも、ヨブはその唇によって罪を犯さなかった。」（2：10）

神のみ前に立つ神秘的な服従、見習うべき態度が最初から紹介されています。そのような服従だけが、人生の悲劇を体験している時に、光明を与えてくれます。

4. 試練が長引くと考え直してしまう危険がある。

神の恵みによって、人間は服従の態度を取ることができますが、その後元に戻ってしまいがちです。これこそが試練の厳しい面です。ヨブ記は2章までにして「ヨブの神への愛が本物だったので、彼は忍耐し続けた」ということで物語を終えることもできました。けれどもそうしませんでした。待たなければいけません。

ヨブが置かれた状況は、生涯で一度だけ「はい」と試練を承諾して受け入れたらいい話ではありません。むしろ「はい」言って受け入れた後、本当にそうできるのか試される出来事が繰り返されます。そのことはマリアに代表されます。私たちも同じようなことを体験します。難しい決断、重大な事件に遭遇すると、はじめは受け入れ情熱を注ぎます。けれども、少し思い巡らすうちに、色々な考えが渦を巻き始め「はい」と受け入れたことに後悔します。「自分にできるのか？」と疑い始めます。これこそまさに試練です。「はい」と受け入れた姿勢を保ち続けることこそ本物の営みです。本物になるためには、日々の生活を通してふるいにかけていられる必要があります。ヨブの試練は、全財産を奪われ、全身が傷に覆われたこと以上に、それを失えば自分ではなくなってしまうようなことを指摘し続ける友人との議論に延々と耐えなければならないことでした。この時から試練はヨ

ブの知性の中で働き始め、絶え間ない試練となります。私たちもそのような試練に陥って倒れそうになります。それは恐ろしい労苦のうちに沈んでしまう試練です。

もっとも貧しい人々の本

私たちは、自分たちの罪のせいでも苦しんでいます。しかし、大勢の人は当然ではない苦しみ、自分の犯した罪とは見合わないほどの苦しみにあえいでいます。人類の4分の3にもものぼる人々が、極貧や苦悩と抑圧のもとで生きています。これだけの膨大な人の存在が問題を提起します。「生まれたこと、生きていることにいったいどんな意味があるのか？」 「その意味を語れるだろうか？」このような悲劇的な問いかけに対応できるのは、生活の日常からはみ出したヨブのような型破りの本でしょう。

振り返りの質問

Q.これまでにヨブが受けたような試練があったでしょうか？ どのような態度で試練に相對しているでしょうか？ 試練を引き受ける態度でしょうか？ 試練を避ける態度でしょうか？

Q.これまでの信仰の歩みで「はい」と受け入れた根本的な決心が試練にあったことがあるでしょうか？ それを守るために戦ってきたでしょうか？ 決心を変えて生きてきているでしょうか？

金持ちの青年（年間20週の月曜日の説教）第一朗読 士師記2：11～19 マタイ19：16～22

この聖堂には、悲しみの聖母、聖母のもっとも厳しく悲劇的な試練のお姿を描いた涙の絵が飾られています。ご自分の子が試練に遭われているマリアが、私たちの試練に手を貸そうとされていることを想像させます。

「私たちの母マリア、私たちはこの靈操の日々と日頃の生活をあなたに捧げます。イエスの神秘に入り込み、彼の試練に少しでもあずかるために努力をお捧げします。」

第1朗読の士師記は、戦争・争い・殺害など、私たちが本来生きるのとは程遠いことが語られています。このような旧約の内容に意味があるのか、と疑問が生じるかもしれません。けれども、士師記はヘブライ人たちが自分の歴史の初めを思い巡らし、次のような質問に答えようとしていると理解できます。

神は私たちに乳と蜜の流れる土地を与えると約束なさったのに、ただでは与えてくれず、多くの苦しみの果てに征服すべき土地として与えられたのはなぜだったのか？ 他民族の脅威にさらされて、この土地にまるで外国人が住むかのように、何世紀も不安定な経験をした後にしか、土地を下さらなかったのはなぜか？ この問いは、結局試練に対する問いであり、ヨブの問いと同じものです。どうして神は私にこのようなことを起こされたのか？ という問いになります。

万事が順調に運ぶ時、人はとかく惰性に流れ、土地を耕す労苦を厭うようになります。士師記では、そのことが繰り返し述べられています。ヨブ記をはじめとする知恵文学は、民族に回心の機会を与えるために書かれたとみなされています。士師記は、ヘブライ人が約束の地を与えられるのに相応しくなかったこと、彼らは土地を手にするたびに主から遠ざかってしまったことを書いています。

このことから大切な真理を汲み取れます。「万事が順調な時、祈り・健康・使徒職・友情・仕事など、うまくことが運ぶ時は簡単にダメになってしまうこと」を学べます。人間は幸福のために造られ、神のたまものを十分に受けるように造られているのですから、そんなことはないはずですが、けれども、人間の歴史を見ると、満たされた状態では偶像崇拜に流れやすく、高ぶったり、能力・権力にこだわり誇示しがちです。

イスラエルが平和や富を勝ち得て偶像崇拜に陥る時、主はイスラエルを試みられたのです。この場合、民を目覚めさせるための神の摂理的な手段に見えてきます。私たちの体験を思い返しても、霊的戦いの態勢を整え直すように促す小さな苦しみとか刺激が絶えずないと、簡単に居眠りをしてしまうことを認めなければなりません。せっかく土地を所有した民は、平和にそれを利用することができなかったところに、神の不思議な摂理があります。苦難や悲しみを通して洗練されていく神秘的な歩みがあります。この神の摂理の理由をよく理解できなくても、神の民の歩みの中に、それを観想するように招かれています。生活の中で、摂理を受け入れられるようになるためです。

福音の朗読（マタイ 19：16～22）で、イエスは一人の青年を試みられます。青年は立派な人間だと自負していました。「私がまだ持っていないものは何でしょうか？ おっしゃってください。私には覚悟があります。」

イエスは簡単に一言お答えになりました。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから私に従いなさい。」（19：21）

青年はまだ自分が目標から遠いことを悟ります。「この言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。」（19：22）

これは試練の神秘、自分が確かだと自負する時、頂点に達していると自惚れている時に起こる試練です。神は、まだ長い道のりがあることを悟らせてくれます。試練の時、つまづかない人は幸いです。

この青年の悲劇は、試練であることに気づかなかったことです。彼はイエスの招きをあまりに真面目に、正直に受け止めたと言えるでしょう。もし彼が次のように答えたとしましょう。「主よ、

あなたは私に難しいことを求められます。今初めて本当に目が開かれました。あなたの提案に従うためにどうしたらいいかわかりませんが、どうぞ助けてください。その恵みを与えて下さい。」彼がこのように答えていたら、人生は全く違うものになっていたでしょう。

青年は、イエスの言葉が自分の弱さを暴露したこと、そして弱さに驚く必要はない、と受け止められませんでした。弱さが暴露されたのは、イエスの方により早く近づくためだと気付きませんでした。こうして彼は、悲しみながら立ち去って行きました。彼の例は、試練の時、心を閉ざして受け入れず、命に向かって歩めなかった例の1つです。

「主よ、私は弱い者だと打ち明けるために、み前にいます。あなたは私たちに必ず何かを望んでおられます。私たちが試練に陥らせるかもしれないあなたの要求は何でしょう？ まだ想像ができません。また、あなたの望まれることを受け入れるのに苦労し、嫌気がさしたとしても驚きません。どうぞ私たちがあわれんでください、あわれみをかけてください、と祈ろうと思います。

十字架につけられたイエスの母マリア、あの金持ちの青年に、主が望んでおられたような愛と謙遜で、私たちの心を柔らかくしてください。私たちが無力で、神の望んでおられることを拒む時、それをあなたの御子の愛のうちに、霊的に成長するプロセスになるように導いてください。イエスの死と復活のたまものによって、心の貧しさ・心配・恐れなどの病から癒してください」

2. 自分を受け入れかねているヨブ

私は長い間、ヨブ記を霊操のテキストに使うのをためらっていました。なぜなら、ヨブ記のメッセージを理解するには長い戦いが必要だからです。人間の試練について語るだけでなく、聖書の他の部分には見られない当惑させる主張があるからです。ヨブ記そのものが1つの試練になります。この困難への対策は何でしょうか？

1. 驚くことに出会っても度肝を抜かれないで、テキストに挑戦し、ヤコブのように神と戦うことです。

「何を言いたいのか？」「どのような手順で話したいのか？」「どのような歩みを経て述べるのか？」を理解することです。この問いに対する決定的な答えはまだありません。私たちは次のような問いに心を柔らかくしながら答えていきましょう。「主よ、あなたはここで何を私に語っておられるのですか？」「どのように私の生活の中で、葛藤の中で神について語り、あるいは黙するための示唆となるのでしょうか？」「この本は、私とあなたの神秘に何か関係があるのですか？」

アウシュヴィッツのカルメル的事件に関するユダヤの世界との論議（1989年にアウシュヴィッツにカルメル会が修道院を建てたことを巡って起きたユダヤ人の反対に対して、キリスト教徒が起こした不肖事件）、ホロコースト以後、神について語ることは不可能で黙るしかない、という意見が出されています。この言葉は、ドイツばかりでなく様々な国で良心のある人たちの心に刻まれています。ですから、自問してみましよう。悲劇の後には黙るしかないのでしょうか？

ヨブ記は、人間のもっとも傷つきやすい点に触れます。だからこの本を避けるのです。神について語るにしても、私たちが抱いている神のイメージがかき乱されてしまい、なかなか受け入れられないのです。ですから、ヨブ記を読むには、祈り・礼拝し・問い・嘆願しながら戦うことが求められます。これが困難を乗り越える一番の方法です。

2. 黙想の材料を個人的な愛情のこもった祈りに変えることです。

置かれている具体的な状況、教会・人類の苦しみ・・・それらに深く関わりながら祈ることです。詩編の半数を占める嘆きの詩編を再発見するのも良い方法です。ヨブ記は、嘆きの詩編の導入とみなされています。例えば、詩編 88 と今日祈るヨブ記を関連させることもできます。詩編の最後の句は「愛する者も友も、あなたは私から遠ざけてしまわれました。今、私に親しいのは闇だけです」で終わっています。ヨブ記は「どうすれば苦悩の中で信仰を生きられるか？」の問題を突き付けます。

3. スケジュールをしっかり立てましょう。

これまでの自分の経験から、1日の黙想の時間割を決めてください。沈黙・読書・口祷など・・・どれくらいの時間を当てるか決めます。特にロザリオは有益です。次々に移り変わる私たちの状態に合わせた祈りを取り入れるのは、ヨブ記の難しさを乗り越える助けになります。

ヨブは誕生の日を呪う

ヨブ記 3 章を黙想しましょう。「何をテキストは言っているのか?」「私にとってどんなメッセージがあるのか?」問いましょう。

やがてヨブは口を開き、自分の生まれた日を呪って言った。わたしの生まれた日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も。その日は闇となれ。神が上から顧みることなく／光もこれを輝かすな。暗黒と死の闇がその日を贖って取り戻すがよい。密雲がその上に立ちこめ／昼の暗い影に脅かされよ。闇がその夜をとらえ／その夜は年の日々に加えられず／月の一日に数えられることのないように。その夜は、はらむことなく／喜びの声もあがるな。日に呪いをかける者／レビヤタンを呼び起こす力ある者が／その日を呪うがよい。その日が、わたしをみごもるべき腹の戸を閉ざさず／この目から労苦を隠してくれなかったから。なぜ、わたしは母の胎にいるうちに／死んでしまわなかったのか。せめて、生まれてすぐに息絶えなかったのか。なぜ、膝があってわたしを抱き／乳房があって乳を飲ませたのか。それさえなければ、今は黙して伏し／憩いを得て眠りについていただであろうに。今は廃虚となった町々を築いた／地の王や参議らと共に 金を蓄え、館を銀で満たした諸侯と共に。なぜわたしは、葬り去られた流産の子／光を見ない子とならなかつたのか。そこでは神に逆らう者も暴れ回ることをやめ／疲れた者も憩いを得 捕われ人も、共にやすらぎ／追い使う者の声はもう聞こえない。そこには小さい人も大きい人も共にいて／奴隷も主人から自由になる。なぜ、労苦する者に光を賜り／悩み嘆く者を生かしておかれるのか。彼らは死を待ってい

るが、死は来ない。地に埋もれた宝にもまさって／死を探し求めているのに。墓を見いだすことさえできれば／喜び躍り、歓喜するだろうに。行くべき道が隠されている者の前を／神はなお柵でふさがれる。日ごとのパンのように嘆きがわたしに巡ってくる。湧き出る水のようにわたしの呻きはとどまらない。恐れていたことが起こった／危惧していたことが襲いかかった。静けさも、やすらぎも失い／憩うこともできず、わたしはわななく。

2章では、ヨブは神を呪った様子はありませんでしたが、厳しい出来事が続き耐えきれなくなつた。本当の試練はやっと始まったと気づきます。神への服従は、知性に、心に、体に入らなければできませんが、それはとても大変なことです。7日間の沈黙の後、ヨブの心にくすぶっていた噴火山が爆発します。テキストを4つに区切ってみましょう。

1. 1～10節

誕生日を呪うことがテーマです。「もし昼間なら闇となれ、もし夜ならそこに喜びが入らないように陰惨な闇となれ。」ヨブはその日を時間から抹殺しよう、原初の非存在の闇に引き戻そうと試みます。このようなテーマは聖書では稀です。むしろ命への賛歌が多くなっています。ヨブの嫌悪感と並ぶ箇所もあります。エレミヤ書では預言者が次の叫びをあげています。

呪われよ、わたしの生まれた日は。母がわたしを産んだ日は祝福されてはならない。呪われよ、父に良い知らせをもたらし／あなたに男の子が生まれたと言って／大いに喜ばせた人は。その人は、憐れみを受けることなく／主に滅ぼされる町のように／朝には助けを求める叫びを聞き／昼には鬨の声を聞くであろう。その日は、わたしを母の胎内で殺さず／母をわたしの墓とせず／はらんだその胎を／そのままにしておかなかったから。なぜ、わたしは母の胎から出て労苦と嘆きに遭い／生涯を恥の中に終わらねばならないのか。（エレミヤ 20：14～18）

エレミヤは並外れて優れていて、世界を洞察する力も与えられていました。それでもヨブのように嘆くようになりました。ヨブは例外的な存在ではなく人間のもっとも悲劇的瞬間を代表しています。

2. 10～19節

テーマは、誕生の日を抹殺だけでなく**死を渴望すること**です。

「なぜ、わたしは母の胎にいるうちに／死んでしまわなかったのか。せめて、生まれてすぐに息絶えなかったのか。」（3：11）

この箇所は、ヨナのエピソードを思い出させます。神のなさり方に失望してふさぎ込み、主に命を絶ってくださいと願いました。

「ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。彼は、主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐

れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きていたよりも死ぬ方がましです。」
(ヨナ4：1～3)

ヨナは、自分の預言の言葉によって自分自身が否定されたと感じました。悔しさ、いらだちのあまりに死を望みます。

もう一人の卓越した人物、エリヤの姿が思い浮かびます。彼は、主のみ名によって偽預言者と対抗し、勝利できずに逃亡します。イザベル女王の脅威を感じ恐れしました。

「それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。ユダのベエル・シェバに来て、自分の従者をそこに残し、彼自身は荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けた。彼は一本のえにしだの木の下に来て座り、自分の命が絶えるのを願って言った。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません。」 (列王上19：3～4)
神と親しく生きてきたエリヤでさえも、成功できなかったので失望に陥りました。

3. 20～23 節

誕生の日を呪い、死を願う態度から命そのものに意味がない、というところに至ります。

「なぜ、労苦する者に光を賜り／悩み嘆く者を生かしておかれるのか。彼らは死を待っているが、死は来ない。」

4. 24～26 節

ヨブが今の体験をまとめて語ります。

「日ごとのパンのように嘆きがわたしに巡ってくる。湧き出る水のようにわたしの呻きはとどまらない。恐れていたことが起こった／危惧していたことが襲いかかった。静けさも、やすらぎも失い／憩うこともできず、わたしはわななく。」

7日の沈黙を終えたヨブの叫びが描かれています。誕生を忌み嫌って退け、死を願い、苦しみの人生はみな無意味だと宣言し、最後に自身のことを「こうして私は憩うこともできず苦しんでいる」と結びます。

ヨブの叫びと嘆きの祈り

これから3章の本格的な祈りに入ります。次のように自問してみましよう。「ヨブの表現は大げさなのでしょうか?」「もしそうだとしたら永遠の価値ある聖書に組み入れられたのでしょうか?」「私たちにも似た体験があるのでしょうか?」

例えばある人が、自覚を持って不治の病に直面する時、このような叫びや嘆きがほとぼしするのは稀ではありません。患者は「どうしてよりによって私が・・・」と悲劇的な反発を起こします。私た

ちも回復の見込みのない重い病にかからないとは限りません。そんな時、ヨブの叫びが私たちの叫びとなり得ます。あるいは、立て続けに災いや不幸に見舞われ、失望に追い込まれる人々のことを考えましょう。聖書がこういう感情を払い退けることなく、靈感を受けた聖書の中に保ってきたことは素晴らしいことのように思えます。

ヨブの問題を広げて考えてみましょう。悲惨な状態が世界の大部分の人に及んでいます。出生率の高い途上国で、すでに病を負って生まれ、あるいは障害を持って生まれ、誕生の時から必要な世話に欠いて成長を妨げられています。こう考えると、ヨブの叫びは今日の世界にも叫ばれています。死を願う根深い誘惑は、少なくない人を襲っています。ヨブ記3章は、どの時代にも実在する“見捨てられた”と感じ人々の叫びと重なります。

聖書がヨブ記を嘆きの祈りとして取り入れているのは偶然ではありません。グティエレスは、ヨブ記のジャンルは嘆きの詩、神の前に自分の悲惨さを訴えるものだと書いています。

西欧のメンタリティでは「嘆き」をあきらめ、自己憐憫、困難を乗り越える力のなさの現れ、と否定的に受け止める傾向があります。けれども、聖書的に考えると「嘆き」は祈りと深く結ばれており、嘆願や神への訴えの1つの大切な要素です。教会が始まって日の浅い地方の教会では、このような形の祈りがよく生まれます。ラテンアメリカの民衆の間に、十字架上で死んだキリストに対する信心が盛んに行われています。そこで流される涙は貧しい者の苦しみを表しています」（グスターボ・グティエレス『ヨブ記』P73 一部表記を変えています）

注釈書の終わりでは、別の視点で嘆きの祈りの神秘を説明しています。

「この物語の驚くべき点は、ヨブが別の神になびく姿を少しも見せていないことです。神への怒りの炎を燃やしていますが、神との戦いの場に踏みとどまり続けています。ヨブは暗闇と深淵の中でひるまず、別の法廷を求めようとしなかった。友人が別の神を示しても心変わりすることはなかった。自分にひどい目にあわせている神から逃げなかった。非難してもその神のもとに避難した。幻滅を与え、絶望に陥らせた神に信頼を置いている。・・・致命的な痛手を負わず敵を自分の友として受け入れたのです」（同書 P339 一部表記を変えています）

嘆きの祈りは、心の深い傷からうみを絞り出し、心を揺さぶる祈りです。私たちの内面に抱える苦悩から解放さえできる祈りです。ヨブの歩みは、神を再び仰げるようになる、尊厳と真実を得られるための、解放と清めの歩みです。

勧め

3章を祈るための4つのヒントを紹介します。

1. 生活の中で、嘆きの祈りとつぶやき(不平不満)とを見分けることを学ぶ必要があります。

つぶやきは普通のことです。誰でも何かに文句を言い、不平を言います。他人の悪口を聞かずに済む日はないくらいかもしれません。嘆きの本当の意味は、神のみ前に泣くことです。でもその意

識が失われています。抵抗・苛立ち・怒りなど、心を波立たせますが、正しい吐口が見つかりません。周囲に八つ当たりしたり、家庭・コミュニティを不幸にします。父である神だけが子である私たちの反抗や叫びを我慢できます。私たちが神と争えるのは、どこまでも善良で力ある神だからです。神は、エリヤ・ヨナ・エレミヤ・ヨブなどからの対決を受け入れてくださったように、私たちとの対決も受け入れてくださいます。ヨナが死を願ったとき叱ったのは確かですが、神は彼が言いたいことを言うのをお許しになりました。

嘆きの祈りに訴えることは、不平不満の中で悶々とする生活を断つ最も効果的な手段です。なぜなら、不平は人間的レベルで展開し、問題の核心に触れることがないので解決の道も持たないからです。祈りの中で、深い嘆きを神に訴えるならば、苦しみのふさわしい表現法を取り、問題の解決の糸口を見つけることができるでしょう。

私自身、かつて「聖書の中で、今の自分にぴったりのページがあるだろうか？」と問いたい気持ちになったことがあります。そしてエレミヤの哀歌からそれを見出し、平和を味わいました。非難や仕返し、恨みを晴らす代わりに、葛藤に満ちた預言者の言葉が、心を和ませてくれました。

貧しい人たちが金持ちよりも忍耐力を持っている理由は、内面的で深い生活の知恵を失っていないからです。これを見失った人は怒りで反発し、自分を全ての主人（あるじ）と思い込み、物事が自分の思い通りに運ばないと他人のせいにしてしまいます。

2. ヨブは意味がわからず受け入れられない体験をします。（3：24～26）

ヨブが置かれている状態は、動機付けを失いやる気もなくなり、戦う気力をもう見出せない人の状態です。その状態は、私たちへの警鐘のように響きます。動機を奪われてやる気を失うと、恐怖を覚えます。結婚して間もない二人が訪問して「やる気がなくなった」と打ち明けてきたとき私たちは恐怖に襲われます。理由は2つあります。まず、二人の状況がいつ自分のものになるかわからないからです。2つ目は「やる気がなくなった」という言葉は、もう訴える余地がなく、逃避の他に道がない、と思われるからです。「私はもう何もしたくない、でもそれについて私に一体何の責任があるのか？」という気持ちを肯定する言葉だからです。

ヨブ記は、難しい状態が含むネガティブな力をそぐために、逆にそれをしっかり見つめなさい、と勧めます。勇気を持って問題を見極め、何もなす術がないかのように恐ろしいものと思ひ込むな、と戒めてくれます。

動機付けを奪われてやる気を失うとは「実際何を意味するのか？」わからなくなっている状態です。動機付けを失った人は、客観的に何か変わったわけではありません。変わったとすれば“無私の心”で何かする動機付けを理解できなくなっただけのことではないか？ と考えるのが良いでしょう。

ヨブ記の序文で、神の賭けを黙想しました。そこで神は、普通感じられる何かの報い、満足感が欠ける状態でも、人間にはまだ“無私の愛“が可能だと教えてくれています。動機付けを失った人は、その時こそこう言うべきでしょう。「生まれて初めて、今こそ、私が人間らしくなり始める機会に恵まれた。私はもう、今までのように報われたと言う満足感が次の行為に誘う連鎖に支えられなくなったのだから」

私たちの行為の98%は、支えている報いを交換し合うことで結ばれた実りです。それは当然のことです。けれども、無私無償の愛が存在することを証明できるのは、神とその十字架につけられた愛の前に裸で立つ瞬間です。これがまさにヨブ記の賭けです。ヨブは動機付けを奪われやる気を失ったと叫んでいますし、死を望みさえしました。命に意味がない、と感じましたがヨブはその気持ちを神に叫びます。不幸にあっても、ヨブは神に求め続けています。

動機付けを奪われやる気のない状態で、ヨブの自由—無私無償の愛を選べるか疑うことができた自由—が浄化されます。人間ヨブは、次第に本当の自分自身の姿を垣間見るようになります。#
これ以上は身を引けない限界に達したと思う時、実は私たちの自由が最も純粋な姿で花開くようになったに過ぎないのです。イエスは、その無償の愛を奇跡だけでなく十字架上でも私たちに示してくださいました。それは、とらわれない心で、無償の愛と報いを期待する行為を比較し、自分は今どちらなのかを見つけるためです。#

人間としての尊厳は、意気消沈してもなお、神を愛すせることをヨブから学びたいものです。もし自分の中に欲求不満がもたげたり、自分の行為は無意味ではないかと恐れているのに気付いたり、無償の愛を信じられなくなった時です。嘆きの祈りの形を取って神に自分の思いを打ち明けましょう。#

3. 私たちはありのままを受け入れなければなりません。

たとえば、貧しい人々について語る時、自分は彼らの状態を本当には分かち合えないという苦痛を感じます。極貧の中で生まれ、その中で生きてきた人々と私たちは同じではありません。それではどうしたらいいのでしょうか？ 貧しい人たちの格好を真似したらいいのでしょうか？ とんでもないことです。私たちは今の状態を主に感謝し、私たちとは違った立場にある兄弟姉妹のために今自分に何ができるか教えていただかなければなりません。彼らから何をいただくことができるか自分に問うのです。そうすれば、彼らの方でも同じ問いをするでしょう。私にとって大切なのは、神への愛に感謝で答え、できるだけ人を愛することです。自分であることを止めようとするのは、悪魔的な自惚れです。#

ヨブ記は、悪魔的な自惚れから解放し、本当は互いに与え合うために私たちは生まれてきたことを教えてくれます。そして、自分自身と兄弟姉妹を謙虚に受け入れるように助けてくれます。愛を込

めて彼らの心に耳を傾けるなら、多くのことを学べます。それがないと、援助をしようにも彼らからは受け入れてもらえません。#

#

4. 今回の霊操のテーマ「あなたがたは、私が種々の試練にあった時、絶えず私と一緒に踏みとどまってくれた。」と言うことを思い起こしましょう。

ゲッセマネのイエスにお尋ねしましょう。#

「主よ、あなたは全てが無意味に感じられ、何もしたくなくて、心を動かすものが何もないと感じたことがありますか？ そんな時、どのように対処されましたか？」#

聖カルロ・ボロネオは、いどこから「欲求不満や自分が何をしても役に立たないと嫌気がさした時にどうします？」と聞かれた時にこう述べています。小さな詩編の本を見せて「いつもポケットにこれをしのばせているんだ」と答えました。聖ボロネオは、嘆きの詩編を唱えることで、苦しみの吐口を得ていました。神の神秘の前に、呼吸と信仰を取り戻していました。#

#

聖書に含まれる嘆きは、浄化の力がある泉です。この泉に親しむ恵みを主に祈りましょう。#

振り返りの質問

Q. 神が与える試練に自分はどれくらい持ち応えられるのでしょうか？ 今までに長い試練にあったことがありますか？

Q. その試練は、世界の貧しい人たちの試練と比べたらどうでしょうか？

Q. 詩編などの嘆きの祈りに自分の心を乗せて祈ったことがあるのでしょうか？ それほどの箇所でしょうか？

3. ヨブの良心の究明

ある哲学者が、ヨブ記を読む際の陥りがちな見解を示しています。

「『人間にとって最良のもっとも望ましいことは何でしょうか？』と言う質問に、お前にとって最善のことは、絶対実現不可能なのだ。それは生まれないこと、存在しないこと、無であることだ。だが、お前にとってそれに次ぐ良いことは、早く死ぬことだ。」と書いています。

「ヨブ記の内容とこの類いの発言にどのような違いがあるのか？」を考えます。両者には、重なる表現はありますが違いは底知れません。ただ、聖書の中でも特異なヨブ記を理解するのは並大抵ではありません。祈りと謙遜の心、礼拝の心で近づきましょう。最初を感じる戸惑いを乗り越え、どこに導かれるのか分からないまま、みことばが促す難しい道を歩みましょう。

「主よ、あなたの新しく深められた知識を私たちにお与えください。聖書のことばを理解できない時も、人間の理解を超えるあなたの秘義を感じさせてください。あなたを知り、私たち自身を知り、人々の苦悩を理解させてください。そして、一段と新鮮で真実なあなたの体験に入らせてください。」

ヨブの最後の告白

ヨブ記全体を読むことはできないので、29～31章を取り上げます。これは神との対話に先立つ、ヨブが最後にした長い大切な告白です。

1. 29章 「過去を懐かしむ歌」

この章の動詞は、すべて過去形になっています。当時、自分が生きていた環境を回顧しています。ヨブは言葉をついで主張した。どうか、過ぎた年月を返してくれ／神に守られていたあの日々を。あのころ、神はわたしの頭上に／灯を輝かせ／その光に導かれて／わたしは暗黒の中を歩いた。神との親しい交わりがわたしの家に入り／わたしは繁栄の日々を送っていた。あのころ、全能者はわたしと共におられ／わたしの子らはわたしの周りにいた。乳脂はそれで足を洗えるほど豊かで／わたしのためには／オリーブ油が岩からすら流れ出た。（1～6節）

29章最初の場面で、ヨブは神の友として喜びに生きていた自分を描いています。祈りにおいても、生活においても神を感じ、いつも共にいてくださる神を味わっていました。

わたしが町の門に出て／広場で座に着こうとすると 若者らはわたしを見て静まり／老人らも立ち上がって敬意を表した。おもだった人々も話すのをやめ／口に手を当てた。指導者らも声をひそめ／舌を上顎に付けた。わたしのことを聞いた耳は皆、祝福し／わたしを見た目は皆、賞賛してくれた。（7～11節）

第2の場面では、神との親しい関係だけでなく村人との関係を描いています。

わたしが身寄りのない子らを助け／助けを求める貧しい人々を守ったからだ。死にゆく人さえわたしを祝福し／やもめの心をもわたしは生き返らせた。わたしは正義を衣としてまとい／公平はわたしの上着、また冠となった。わたしは見えない人の目となり／歩けない人の足となった。貧しい人々

の父となり／わたしにかかわりのない訴訟にも尽力した。不正を行う者の牙を砕き／その齒にかかった人々を奪い返した。(12～17 節)

ヨブは正しい人で、貧しい人たちに積極的に尽くしていました。村人も彼の行動を認めていました。見捨てられた人々、恵まれない人々との関わりの必要を感じていました。

わたしはこう思っていた／「わたしは家族に囲まれて死ぬ。人生の日数は海辺の砂のように多いことだろう。わたしは水際に根を張る木／枝には夜露を宿すだろう。わたしの誉れは常に新しく／わたしの弓はわたしの手にあって若返る。」(18～20 節)

これが彼の老後の夢でした。ヨブは永遠の若さを保てると思ったし、いつまでも実りを得られると思っていた。

人々は黙して待ち望み／わたしの勧めに耳を傾けた。わたしが語れば言い返す者はなく／わたしの言葉は彼らを潤した。雨を待つように／春の雨に向かって口を開くように／彼らはわたしを待ち望んだ。彼らが確信を失っているとき／わたしは彼らに笑顔を向けた。彼らはわたしの顔の光を／曇らせることはしなかった。わたしは嘆く人を慰め／彼らのために道を示してやり／首長の座を占め／軍勢の中の王のような人物であった。(21～25 節)

この場面で、ヨブは社会の中での自分の存在意義、特に政治的な役割を思い返しています。ヨブは、正しく、善良で、貧しい人々を大切にしましたがその報いもありました。人々は彼に敬意を払い、耳を傾け、称賛を惜しみませんでした。このような状態は当然のことではなくなり、今ヨブは過酷な人生をあえいでいます。

2. 30 章 「現在と恐怖の歌」

辱められ、蔑まれ、攻撃され、恐怖に襲われ、神に敵対し、泣き、苦しむヨブの奈落の底に落ちていく人間の姿が描かれます。

辱められるヨブ

だが今は、わたしより若い者らが／わたしを嘲笑う。彼らの父親を羊の番犬と並べることすら／わたしは忌まわしいと思っていたのだ。その手の力もわたしの役には立たず／何の気力も残っていないような者らだった。無一物で飢え、衰え／荒涼とした砂漠や沼地をさまよいあかざの葉を摘み／れだまの根を食糧としていた。彼らは世間から追われ／泥棒呼ばわりされ身震いさせるような谷間や／土の穴、岩の裂け目に宿り 茨の間で野ろばのようにいななき／あざみの下に群がり合っていた。愚か者、名もない輩／国からたたき出された者らだった。(1～8 節)

蔑まれるヨブ

ところが今は、わたしが彼らのはやし歌の種／嘲りの言葉を浴びる身になってしまった。
彼らはわたしを忌み嫌って近寄らず／平気で顔に唾を吐きかけてくる。（9～10節）

攻撃されるヨブ

彼らは手綱を振り切り、わたしを辱め／くつわを捨てて勝手にふるまう。彼らは生意気にもわたしの右に立ち／わたしを追い出し、災いの道を行かせ 逃げ道を断ち、滅びに追いやろうとする。それを止めてくれる者はない。襲って来て甚だしく打ち破り／押し寄せて来て廃虚にする。
（11～14節）

恐怖に襲われるヨブ

死の破滅がわたしを襲い／わたしの力は風に吹きさらわれ／わたしの救いは雲のように消え去った。もはや、わたしは息も絶えんばかり／苦しみの日々がわたしを捕えた。夜、わたしの骨は刺すように痛み／わたしをさいなむ病は休むことがない。病は肌着のようにまつわりつき／その激しさにわたしの皮膚は／見る影もなく変わった。わたしは泥の中に投げ込まれ／塵芥に等しくなってしまった。（15～19節）

これでもまだ足りないかのように、神が敵対なさいます。

神よ／わたしはあなたに向かって叫んでいるのに／あなたはお答えにならない。御前に立っているのに／あなたは御覧にならない。あなたは冷酷になり／御手の力をもってわたしに怒りを表される。わたしを吹き上げ、風に乗せ／風のうなりの中でほんろうなさる。わたしは知っている。あなたはわたしを死の国へ／すべて命あるものがやがて集められる家へ／連れ戻そうとなさっているのだ。（20～23節）

だからヨブは泣きます。

人は、嘆き求める者に手を差し伸べ／不幸な者を救おうとしないだろうか。わたしは苦境にある人と共に／泣かなかっただろうか。貧しい人のために心を痛めなかつたろうか。わたしは幸いを望んだのに、災いが来た。光を待っていたのに、闇が来た。わたしの胸は沸き返り／静まろうとしない。苦しみの日々がわたしに襲いかかっている。（24～27節）

見捨てられたヨブは真っ暗闇の中に生き、不幸で苦悩に苛まれます。

光を見ることなく、嘆きつつ歩き／人々の中に立ち、救いを求めて叫ぶ。山犬の兄弟となり／駝鳥の仲間となったかのように わたしの皮膚は黒くなって、はげ落ち／骨は熱に焼けただれている。喪の調べをわたしの豎琴は奏で／悲しみの歌をわたしの笛は歌う。（28～31節）

3. 31章 「将来と潔白の歌」

自分の恐ろしい状態を描き、ヨブは立ち上がり、自分が倫理に照らし合わせて潔白だと告白します。神に向かって自分への反証を出せと挑んで終わります。

わたしは自分の目と契約を結んでいるのに／どうしておとめに目を注いだりしようか。上から神がくださる分は何か／高きにいます全能者のお与えになるものは何か。不正を行う者には災いを／悪を行う者には外敵をお与えになるではないか。神はわたしの道を見張り／わたしの歩みをすべて数えておられるではないか。わたしがむなしいものと共に歩き／この足が欺きの道を急いだことは、決してない。もしあるというなら 正義を秤として量ってもらいたい。神にわたしの潔白を知っていただきたい。わたしの歩みが道を外れ／目の向くままに心が動いたことは、決してない。この手には、決して汚れはない。もしあるというなら わたしの蒔いたものを他人が食べてもよい。わたしの子孫は根絶やしにされてもよい。わたしが隣人の妻に心奪われたり／門で待ち伏せたりしたことは、決してない。もしあるというなら わたしの妻が他人のために粉をひき／よその男に犯されてもよい。それは恥ずべき行為であり／裁かれるべき罪なのだから 滅びの国までも焼き尽くす火が／わたしの収穫を根まで焼き尽くしてもよい。(1～12節)

ヨブは自分がみだらな罪、偽り、姦淫について潔白だと宣言します。続いて奴隷に対しても潔白だと宣言します。いつも正義をもって接してきたと訴えます。

わたしが奴隷たちの言い分を聞かず／はしための権利を拒んだことは、決してない。もしあるというなら 神が裁きに立たれるとき／わたしが何をなしえよう。神が調べられるとき何と答えられよう。わたしを胎内に造ってくださった方が／彼らをもお造りになり／我々は同じ方によって／母の胎に置かれたのだから。(13～15節)

エリファズが発したとがめに対して、貧しい人たちに慈悲を示したと宣言し、自己弁護します。わたしが貧しい人々を失望させ／やもめが目を泣きつぶしても顧みず 食べ物を独り占めにし／みなしごを飢えさせたことは、決してない。いや、わたしは若いころから／父となって彼らを育て／母の胎を出たときから／やもめたちを導く者であった。着る物もなく弱り果てている人や／からだを覆う物もない貧しい人を／わたしが見過ごしにしたことは、決してない。わたしが裁きの座で味方の多いのをいいことにして／みなしごに手を振り上げたことは、決してない。もしあるというなら わたしの腕は肩から抜け落ちてもよい。肘が砕けてもよい。神の下される災いをわたしは恐れる。その怒りには堪えられない。(16～23節)

富を乱用し、偶像崇拝をしたと言う訴えに対してはこう宣言します。

わたしが黄金を頼みとし／純金があれば安心だと思い 財宝の多いことを喜び／自分の力を強大だと思ったことは、決してない。太陽の輝き、満ち欠ける月を仰いで ひそかに心を迷わせ／口づけ

を投げたことは、決してない。もしあるというなら これもまた、裁かれるべき罪である。天にいます神を否んだことになるのだから。(24～28 節)

ヨブの憎悪と、もてなしの慣しを破った訴えに対しても自己弁護します。

わたしを憎む者の不幸を喜び／彼が災いに遭うのを見て／わたしがはやしたてたことは、決してない。呪いをかけて人の命を求めることによって／自分の口が罪を犯すのを許したことは、決してない。わたしの天幕に住んでいた人々が／「彼が腹いっぱい肉をくれればよいのに」と言ったことは 決してない。見知らぬ人さえ野宿させたことはない。わが家の扉はいつも旅人に開かれていた。(29～32 節)

最後に、偽善と搾取についてこう自己弁護します。

わたしがアダムのように自分の罪を隠し／咎を胸の内に秘めていたことは、決してない。もしあるというなら 群衆の前に震え、一族の侮りにおののき／黙して門の内にこもっていただろう。どうか、わたしの言うことを聞いてください。見よ、わたしはここに署名する。全能者よ、答えてください。わたしと争う者が書いた告訴状を わたしはしかと肩に担い／冠のようにして頭に結び付けよう。わたしの歩みの一步一步を彼に示し／君主のように彼と対決しよう。わたしの畑がわたしに対して叫び声をあげ／その畝が泣き わたしが金を払わずに収穫を奪って食べ／持ち主を死に至らしめたことは、決してない。もしあるというなら 小麦の代わりに茨が生え／大麦の代わりに雑草が生えてもよい。ヨブは語り尽くした。

ヨブは、自分の人生は全て正しく行動してきたことを主張し、神に対する挑戦上を叩きつけます。もし神が正義の方なら黙っているはずはなく、この告白が正しいことを認めてくださるはずだと訴えます。(部分) 私たちは、この告白が表現している人間の秘義と神の秘義に分け入レルよう注意深く読み返しましょう。

黙想の手ほどき

3つのヒントをあげます。

1. このような人物は決して実在しなかったことです。

では、なぜこの架空の人物を理解しようとするのでしょうか。それは、たとえヨブのような人間が存在するとしても、30章に描かれている悲劇的な試練を免除されることはなかったことを理解するためです。したがって、試練は神との関わりでつきものです。神と人間との関係は報いがあるかどうか？という交換的正義に基づくのではなく、無私無償の愛にも続いているので試練を伴います。

ただ一人、罪がなかったことを断言できる人がいます。イエスです。「あなたたちのうち、一体誰がわたしに罪があると認めさせることができるか？」 そんなイエスもわたしたちに対する無私無償の愛、試練を免れませんでした。このことは、試練は必ずしも罪の報いとか、誤った状態から抜け出

ること、あるいは魂の浄化と結ばれていないことを示しています。むしろ試練は、神との関わりでどれほど真実か、無私無償の愛に生きているかと関連しています。そして、神との関わりが真実であるかどうかは、報いがやむ時にはっきりとあらわれます。ヨブ記の著者は、“罪からの清めを超える試練を与える神”という神の秘義の側面を追究しています。この側面を、十字架のうちに観想できます。

私たちの状態は、ヨブとは全く違います。29～30章を読み返しながら良心に問うてみましょう。それぞれ置かれた状態で、人間関係で、倫理的な問題について自分はどうかだったのか？ どんなことに違反し、どんなことを疎かにしてきたのか？ 心の中を見ましょう。罰から逃れるのを目的にするのではなく、神が賛美され祝福されるのを願って罪を告白しましょう。

わたしたちは真理に招かれています。神との関わりが自由になるように、いつも神と友情を生きるように招かれています。「わたしはあなたたちを友と呼ぶ、しもべとしてではなく・・・」「あなたがたは、わたしが種々の試練にあったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。」それは愛のためで、決してあなた自身の行いや、あなたの決心に忠実であるためだけではなかったのです。

葛藤に満ちたヨブの物語は、ただの従順、単なる正義を上回るような“賭け”を伴う神との関わりを垣間見せてくれます。偏らない心と清さ、自分を譲渡し、献身する自由の恵みを願いましょう。イエスの御母であり、私たちの母でもあるマリア、神の奥深い秘義のほんの1つの火花でも結構ですから、私たちに味合わせてください。

振り返りの質問

Q. 自分の行動の源は何でしょうか？ 優しさでしょうか？ 親切心でしょうか？ 役に立ちたい気持ちでしょうか？ 人より長けていたい気持ちでしょうか？ それらが報われない、と感じられた時にどう対処（気持ちをまた盛り上げる）できるでしょうか？

Q. 神に挑むヨブの態度をどう感じますか？ 似た体験がありますか？

Q. 無私無償の愛を感じたり、実践したことがあるでしょうか？

Q. 信仰生活に試練は織り込み済み、という覚悟があるでしょうか？

女の中で祝福された方（女王マリアの記念のミサの説教）

第1朗読 イザヤ9：2～4、6～7節 ルカ1：39～47節

聖母被昇天の祝日の8日間中に記念される、女王マリアの祝日です。私たちに求められているのは、愛情こもった祈りとマリアが沈黙のうちにもイエスのそばで長くとどまったように、彼の傍にとどまろうとすることです。

今日の福音箇所は、マリアに捧げられた最初の祝福と考えられます。彼女の幸せの宣言です。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています……主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」（ルカ1：42、45）

これらのことばは、あのエレミヤの「呪われよ、わたしの生まれた日は」（20：14）の叫びと正反対の響きをもっています。今日の箇所では、マリアに対する神の業が讃えられ、賛美と喜びで表現されています。このような歓喜は、神の秘義を感じられない期間が長く、孤独や絶望が深いほど、より一層大きなものになります。預言者イザヤが言っているように、喜びが倍になり、歓喜が増していくようです。刈り入れどきや獲物を分配する時にも似た喜びです。「死の陰の地に住む民」（イザヤ9：2～4）の味わっていた闇の深さに比例するようです。

それぞれが味わっている闇と無意味さの自覚が、神の愛の秘義を一層大きな幸福感につなげます。マリアのうちには、神の秘義に包まれている喜びが表現されています。けれどもマリアの運命がどのようなものであったか振り返ると、光を見た後すぐに再び闇に入ったことがわかります。マリアの生涯には、この預言が実現するのを見るより、理解に苦しむできごとの方が多かったようです。たとえば、貧しさの中での御子の誕生、御子が多くの人から見捨てられたこと、我が子イエスの生涯には天使が告げた偉大なことは何一つ輝かなかったことがわかります。

来る年も来る年も御子の身近に生きる喜びを味わうと同時に、不可解な出来事を通して御子が闇の中に包まれているのを知り、母マリアは大変苦しみました。処女マリアは、厳しい試練に入り、ゴルゴダの闇に至るまで、信仰を歩み通されました。最初の祝福は、その後のマリアの生涯から試練を取り除きはしませんでした。ただ、その祝福は彼女の信仰と委託の歩みの間、いつもマリアに伴っていました。

ですから、このエウカリスティアの中で、私たちの闇と、私たちが心に掛けている人々が体験している暗闇を聖母に委ねましょう。マリアとエリザベトの心にみなぎった喜び、神秘的な富がどのようなものだったか理解させてくれるように主に願いましょう。

私たちが体験している暗黒からも「わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」と叫べるようにしてください。不平をこぼす状態からはい上がり、神の秘義をあらわせるようにしてください。闇の中でも光の中でも、神の秘義に自分を委ねられますように。